

### 第3節 人間的つながりを深める家庭訪問

#### 1 教育活動の土台となる家庭訪問

参観授業を通して培われた信頼関係をベースにして、学年始めの家庭訪問を実施する。その家庭訪問は、まさしく教育の本質をみつめ合う家庭訪問として、共感と連帯の絆を深める大きなチャンスである。

私は私自身に「人間として生きるとはどういうことなのか」を問い、様々な思いを語り合う家庭訪問の一つ一つに人間として生きる勇気をいただいている。そこには私の語りを必死に受けとめてくれる家族の姿があり、私の思いに応え、必死に思いを返してくれる家族の姿がある。

ある生徒は家庭訪問の時の母親の姿に寄せて、次のような生活ノートを綴っている。

【家庭訪問の日、母は涙を流した。先生の思いが母の中に入っていったとき、母の中からこらえきれない思いがあふれてきたんだろう。私は母の涙を見たとき、母のそれまでの人生の中に様々な苦労がありよろこびがあったんだということを痛感した。私はこの日、母の本当の思いにふれることができたように思う。母の思いをしっかりとかつぎ、思いっきり自分の人生を生きていきたいと思った。】

また、親代わりとして孫娘（生徒）を育てているおじいさんは、家庭訪問での私の語りや入学式のこと、参観授業のことに寄せて次のようなことを語ってくれた。

「先生、私は9人兄弟の3番目に生まれた。家は貧しかった。小学校2年からは一切学校には行っていない。字を知らない。全く書けない読めない状態で生きてきた。その中でいろんなことがあった。でも、先生の話を知っていると、人間はどのような状態におかれても、人間としてお互いを大事にしていく関係ができていくと、人間はイキイキしていくことがよくわかる。

私は誰も字を教えてくれない中で、一人で学び、一人で字を覚えてきた。本当に厳しい中であつても頑張ってくることができたのは、いろんな人とつながり、いろんな人に支えられてきたからだと思う。今、会社を退職してからは、今まで字が書けなくて字を書かなかった分、今一生懸命書き物をしている。『そんなに長い時間同じ姿勢で書き物なんかをするから、肩もこつてくるし腰も痛くなる。そんなことをしなくても……』とおばあさんは言ってくれるが、このことは私に課せられた私が生きていく試練だと思って書き続けている。」

この言葉には震えるような感動がある。孫娘（生徒）が隣でおじいさんの表情をじっと見ていた姿に、私は家庭訪問の意味とその重要性を思いっきり自覚する。

私と保護者が、お互いの中にある願いや思いを素直に語り合う姿にふれ、生徒一人一人が自分のあり方や生き方を見つめる家庭訪問。そんな家庭訪問を通して生徒一人一人は、家族のつながりを確かめ、家族の一員として生きる自己をみつめることになる。

家庭訪問は、様々な教育活動の土台となり、生徒一人一人が人間としての生き方を追究していく教育活動の土台となっていくのである。

## 2 生き方を語り合う家庭訪問

学級開きにおける私の語りや、参観授業における生徒たちの語り合いが、保護者との様々な思いや願いを語り合う家庭訪問を実現させていくが、ここでは、学習会や人権・部落問題学習について語り合った中学1年生の家庭訪問を振り返ってみたい。

中学校へ入学して初めての家庭訪問、保護者の学校教育への願いや思いをしっかりとつなげるために、やがて始まる学習会や人権・部落問題学習（全体学習）について語っていくが、その中にはまだまだ社会的立場を自覚していない被差別部落の生徒もいる。

地区・地区外を問わず、すべての子どもたちが誇りと自信を持って主体的に学び続ける日常を築くために、家庭訪問での限られた時間であるが、私は人間教育としての人権教育や同和教育に寄せる思いや願いを語っている。それは教育が機能していく、人間関係を築き上げる営みである。

まず、私立中学校を受験し合格したが、小学校の担任に説得され、板野中学校へ入学してきたA子の家庭訪問を振り返ってみたい。

A子の母親は、板野中学校を選択した不安を私にぶつけるように言われた言葉が、そのときの表情と共に鮮やかによみがえる。

「先生は、板野中学校は素晴らしい学校だと入学式の日語ってくれたけど、それは同和教育だけのことでしょ。」

そして、自分自身が板野中学校の卒業生でありながら、できるならば子どもを板野中学校へ行かせたくはなかった思いを私にぶつけてきたのである。

私は板野中学校の10年間の担任の中で、保護者のこのような思いに幾度となく出会ってきた。そして、そのたびに人間が人間として解放される「よろこび」を私の生い立ち、私の生きざまを通して語ってきた。

「同和教育は教育の中核、教育そのものです。人間としてどう生きていくかということがしっかりしていかなければ、心豊かにたくましく生きていくことはできない。同和教育がしっかりと機能している学校というのは、生徒一人一人が人間としてどう生きていかなければならないのか、何のために学校にきているのかという、目的意識を持って学ぶ子どもたちを育てていく教育が機能していきます。それは人生の様々な困難を見事に克服し、生き抜いていく力を育てていく営みです。

私自身、世間の人々が評価してくれる高校や大学に行けば、私の親も喜んでくれるだろうし、それで自分も幸せになれると思ってきた。事実そんな思いで高校や大学を考えました。

しかし、人間としてどう生きるかという部分がしっかりしていないと人間はすぐに挫折してしまう。私は世間体には振り回される人間ではなく、自分をしっかりと持って生きていく人間をつくらせていきたいと思っています。」

これはそのとき語ったすべてではないが、A子の母親を始めとする多くの保護者に、私はそんな思いを語っていく家庭訪問を通して、私自身が人間として成長させていただいたことを感謝している。

また、A子の家庭訪問の数日後にあった学習会の保護者会で語られたA子の母親の「私は全面的

に先生方を信頼しています。A子を自分に誇りと自信を持って堂々と生きていける子にしてやってください」という言葉は、今も私の中に生きている。私はA子やA子の家族と出会った意味を噛みしめながら、A子とつながり、ひたむきに歩き続ける自分であり続けたいと思う。

家庭訪問の日、A子は私と母親との語り合いを自らに問いかけるように、次のような生活ノートを綴っている。

【私は5年生のとき自分が部落に生まれたことを知りました。すごく嫌でした。つらかった。もう学習会なんて行きたくないって思いました。それからしばらくは学習会に行かず塾に専念していました。担任の先生によく言われました。「学習会行けよ」って…。それでもなかなか行く気になれなかったのですが、一応行ってみました。意外でした。びっくりしました。私だけでした。部落から逃げていたのは…。こんなにすごく勇気のある仲間がいるんだと驚きました。

それからは学習会へ行くのが楽しみになったわけですが、まったく自分が情けないように思いました。それまで私は差別されるのが恐くて逃げてばかりいました。何もかもごまかしていました。でも学習会に行ってみるとわかりました。差別から逃げるのではなく立ち向かうこと、差別は間違いだといい説得できるようになること、差別をなくせるようにしっかりと勉強すること、学習会って大切だなあと思いました。先生方や先輩たちに期待された私たちは「差別は間違いだ」と訴えて、差別に立ち向かっていけるように精一杯頑張ります。差別のない未来をめざして…。】

このA子と3年間、板野中学校で過ごせたこと、そして、3歳下のA子の妹とも3年間板野中学校で過ごせたこと、この出会いに感謝しながら、共に豊かな人生を創造していきたいと思っている。



1995年度板野中学校2年C組 修学旅行 於・草千里（熊本）

### 3 部落問題を直視することの意味

親としての不安や怖れが語られた家庭訪問は、いつまでも心に刻まれている。ここでは、部落差別の現実を痛いほど実感していたB夫の母親との家庭訪問を振り返ってきたい。

厳しい結婚差別に直面しながらも、地区に嫁いできたB夫の母親は、同和教育を語る私に、「先生、中学校ではもうごまかしがきかないんですね」と目に涙をためて、その不安を口にした。私はそんな親の思いをしっかりと担ぐ自分でありたいと願いながら語り出す。

「お母さん、この問題は恥ずかしがって逃げてすむ問題ではないと思う。子どもたちに確かな生き方をつかませていきたい。そのためにも嫌なことが嫌と言える。つらいことがつらいと言える。うれしいことが心の底からうれしいと言い合えるクラスや学年にしていきたい。そして、自分はこのために学校へきて、みんなと本当の仲間になって頑張っていくんだという意識を持たせ、意欲的に学び、自らに自信と誇りを持って人生を切り拓いていく生徒にしていきたい。」

この言葉にB夫もB夫の母親もしっかりとうなずいた。翌日、B夫が綴ってきた生活ノートには、その夜の親子の語り合いと、B夫の思いが切々と綴られている。家庭訪問のあり方と、その意義について考えさせられたを生活ノートのすべての掲載する。

【今日家庭訪問だった。いったい先生はどんな話をしてくれるのかと不安な気持ちで先生を待っていた。勉強のことにしても僕は僕なりに頑張っているけど、まだまだ頑張らなければという気持ちがある。いろんなことを思いながら先生を待っていた。でも先生は勉強のことも話してくれたけど、それとは別にこんなことを話してくれた。それは差別（部落問題）についての話だった。

僕の父さんは同和地区出身だ。小学校のとき、僕はそのことについて知った。始めは一人で悩んでいた。でも学習会でいろんな話し合いをしたことによって、僕は自信がついた。お父さんはものすごく一生懸命働いているし、僕にいろいろな心をぶつけてくれる素晴らしいお父さんだ。

でもお父さんとは何度か話をしたけど、お母さんとはそんな話をしたことがなかった。だからお母さんは今日まで僕のことをとても心配だったそうだ。

先生が帰ったあと、お母さんが「B夫、同和地区のこと、知っていたんか」と僕に聞いた。「僕は知っていた」と言った。それから御飯を食べてお風呂に入って、「もう寝るよ」と言った時、お母さんが「B夫、ちょっとお母さんと話をしよう」と言った。僕は「うん」と言った。お母さんは「B夫は同和地区についてどう思っているの」と言った。僕は思うこと全部をお母さんに話した。

少し言うのはつらいことなんだけど、表面的に仲の良かった子が近所にいた。でもあることがあってその子とほとんど顔を合わさなくなった。それはその子のお母さんが、僕の父さんの里（同和地区）を知った時からだった。僕は本当にものすごくつらかった。これが差別なのかと思った。でも小学校での心の学習で頑張っていく中でH君という仲間が僕の心をわかってくれた。僕が同和地区の人間だと言っても、それがどうしたんかって、向かってきてくれる仲間がいた。僕はたまらなくうれしかった。頑張っただけに思っていることを全部出してよかったと思った。僕にはそんな仲間がそばについていてくれる。もっとそんな仲間をつくりたいと思う。

それともう一つこんな話をしてくれた。お父さんとお母さんが交際していた時、お母さんのおじ

いちゃんとおばあちゃんにすごく反対されて、お母さんはお父さんと会えないようにされたそうだ。それでもお父さんとお母さんは会い続けて、お母さんはおじいちゃんとおばあちゃんに勘当されてしまったそうだ。僕はその話を聞いた時「えっ」と思った。あの優しいおじいちゃんとおばあちゃんが、このことになると鬼のようになるのかと思って信じられなかった。

お父さんはすごくつらかっただろうなあと思う。でもお父さんとお母さんは結婚したんだ。僕はお母さんが恥ずかしそうに言っていたのを見て、何も恥ずかしくない。ものすごく素晴らしいことでないかと思った。それから僕が生まれておじいちゃんやおばあちゃんがお父さんを認めるようになった。

でも絶対そんなことがあるなんておかしい。今でもお母さんのおじいちゃんは、農作業の手伝いにきてくれる人たちに、B夫君はどこの学校に行っているのと聞かれると、「A町（隣の町）」という時がある。僕はそういう嘘を聞いているとき、なぜ嘘をつかないかのかかと思ってくやしい。とてもつらい。おじいちゃんはいったいどんな気持ちでその言葉を言っているのだろう。僕にはまだそのことを言う力はない。

でも、僕は一度おじいちゃんとおばあちゃんに差別について話をすると心に決めた。そのためにこれから始まるみんなとの生活、その中で思いっきり勉強して、自分に対する誇りや自信をつかんでいきたい。】

最も多感な時代を生きる中学生と出会いつながっていく教育の営み、その現実が厳しくとも、心豊かに生き、その存在を輝かせていく仲間の姿がある。私はこのB夫やB夫の母親に象徴される「今」をひたむきに生きる多くの家族に励まされ、生かされてきたことを実感する。まさしく教育は互いへの尊敬と信頼の中でこそ機能する営みである。

#### 4 生き方を問い続ける家庭訪問

最後に、生き方が生き方を揺さぶり、生徒自身の目覚めや立ち上がりを生んできた学級開きや参観授業から自己を問い、家庭訪問を通して自分をみつめた生徒の生活ノートを掲載する。

【あの不安でたまらなかった入学式。その日のことをよく覚えている。クラス分けの紙を見ると私はA組。でもあいにく小学校の時に仲の良かった友だちとはいっしょのクラスではなかった。

どうしようと思っていたこの日、私の心に迫ってきたものがあつた。それは森口先生の話だった。なんでこの先生はこんなに一生懸命にこんなに長く話をするのだろうと思いつつも、「目で話を聞く」という言葉と、「昨日の自分より今日の自分が好き」になるという生き方のすばらしさについての話が、心の中に刻まれた一日だった。私の中学生活のスタートは、入学式後の森口先生の話からだったと思う。

もう一つ入学式の日先生の話を、入学して10日ほどが過ぎて実施された参観授業も強烈だった。入学式の日のようにほとんどの親が教室の後ろに並んでいた。「授業はみんながつくる」という先生の話と「みんなが手を挙げないし、私も手を挙げんでもいいわ」という私の思いが頭の中を駆けめぐっていた。

みんなも私と同じような思いでいたと思う。最初はみんながお互いに遠慮し合っているという感じだった。自分から手を挙げるということは自分では考えられない状態だったと思う。勇気のかけらもなかったようにも思えてくる。自分を思いっきり出せなくて、どことなくうじうじして固くなっている自分が嫌だった。どうにかしてこの自分を変えることはできないだろうかとずっと思っていた。

でも私はこの授業で授業に対する捉え方が少し変わったような気がする。みんなが自分の思っていることを表現していったとき、クラスの空気はものすごく軽くなり、みんなの力に揺り動かされるように大きな勇気がわいてくる。クラスというのはこのためにあるし、このために友だちともつながっていくんだと思った。この感覚は私の心をすごく豊かにしていると思う。

もう一つ1年生のスタートで私を変えてくれたもの、それは参観授業の何日か後にあった家庭訪問だった。家庭訪問の時、先生はみんながイキイキする授業についていろんな話をしてくれた。そのとき、私はまだまだ自分という殻の中で固まっている自分に気づくことができたと思う。私の中にはどこかうじうじしたところがある。そんな私に人間として生きることの誇らしさを示してくれたのが、家庭訪問での先生の話だった。

先生が話された自分の出身についてのお話で、私はハッと気づいた。それは先生だって自分自身の話をされるようになるには相当な勇気がいっただろうし、その中で人間として生きていく誇りや自信をつかんできたんだということだった。

そんな先生の生き方と比べて、自分が自分のクラスで手を挙げて意見を発表することは簡単なことなんだと思ったし、あの家庭訪問の先生の話が私の心の底にあって、いつも私に問いかけてくれているようになっていったと思う。

私はあの家庭訪問の日から、少し勇気を出して自分から手を挙げることができるようになった。ドキドキしながらも自分の意志で自分から手を挙げて発表したとき、私は勇気っていうものはこんなに自分自身を爽やかな気分にしてくれるんだなあと感じた。こういうふうに感じるのが今の私を少しずつ成長させてきたと思う。

やっぱりこれも家庭訪問での先生の話が私の心に響いたからだと思う。家庭訪問の日、先生が帰った後で母と話をした内容もはっきりと覚えている。母は「苦勞した人の言葉には、心を動かされる重さと真実がある。私たちももっと勉強しなければならない」と言った。そして、「ああいう先生が担任になってくれてよかったなあ」とも言っていた。

私は毎日生活ノートを書くことや全体学習を通して、「昨日の自分より今日の自分が好き」と言える生き方を段々とつかんでいくことができるようになったと思う。】